

デーリー東北

2021年(令和3年)10月16日(土曜日) (23)



壁画の原案を手にする。(左から)和田彩奈さん、大久保航也さん、荒木田響音さん

3.11語り継ぐ壁画に

被災地岩手・山田町の防潮堤



防潮堤に色鮮やかな絵を描く学生 (八戸工業大提供)

八戸工業大感性デザイン学部の学生ら有志が今年夏から、東日本大震災の津波で被害を受けた岩手県山田町の防潮堤に壁画を描いている。無機質な全長2500mの巨大な。キャンパス。は、今後数年かけて海生生物などでカラフルに埋め尽くされる

八工大生終わりなきプロジェクト

る。プロジェクトのリーダーを務める、同学部4年の大久保航也さん(20)は「防潮堤の壁画が、津波の恐ろしさや防災意識、地域への思いを未来へつなぐバトンになってほしい」とプロジェクトの意義を語る。(金濱千優希)

同大と山田町に縁が生まれたのは震災直後。町内の学校の校庭が仮設住宅で埋まるなどして、野球ができない子どもたち向けに、同大硬式野球部が野球教室を開催したのがきっかけだった。

壁画プロジェクトは昨年度始動する予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大の

影響で活動できずに終了。先輩の思いを引き継いだのが、同部所属で久慈市出身の大久保さんだった。

「山田町は部活でもプライベートでも何度も訪れた好きな場所。復興支援をされる側が多かった自分も、被災地と一緒に頑張る立場になりたい」。強い決意でリーダーに手を挙げた。

壁画制作の上で不可欠な原画家は、美術部に所属する学部の後輩に当たる和田彩奈さん(20)と荒木田響音さん(21)がデザイン。捕鯨や養殖、祭りといった同町の特徴を学び、鯨やカキ、みこしなどを登場させ、地元住民から愛される壁画を目指した。作業時には原画にさらに手を加え、フラッシュアップしながら描き進める。

プロジェクトには学生約30人が携わり、月に1、2度、同町を訪ね、泊まりがけで活動する。高所での作業に必要な足場は、地元の建設会社が無償で組んでくれた。活動は徐々に住民の目に留まるようになり、荒木田さん

描き足し、描き足し、未来へ

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。